〈共同研究報告〉

中国植物に関する日本の研究

北村四郎

先程の山田慶兒さんのお話を聞いて、たいへん幸せでございました。このような結構な研究会が出来て、たまたま私、まだ生き残っておりまして、それでみなさんに呼んで頂きまして、たいへん幸せで、ありがとう存じます。山田さんは幅の広いお方でございますし、私も前から、人文科学研究所に行っておりまして、山田さんや藪内清さんと久しく昵懇にして頂きました。まぁそういうことです。本日は杉本秀太郎さんや白幡洋三郎さんや芳賀徹さんはご本やとかいろんなご論文、上野益三さんの出版祝賀会の時にもお目にかかりましたし、それから杉本さんはいろいろ文学のご本のことで感心しておりまして、杉本ファンでございます。白幡さんは庭園学の方からいろいろお書きになりました論文を、「面白いなぁ」と思っておりましたし、『植物ハンター』を読ませて頂きました。私自体植物好きでございまして、もともと静岡高等学校の文丙を出まして、杉本さんと同じようにフランス語を専攻したんですけれども、そちらの方へはいかないで、植物が好きで方向をかえました。私の本職は植物分類地理学という、植物の分布と、分化が専門でございまして、それをずっとやっておったんですが、実は本草が好きでございまして、従って本日のは、好きな話でございます。本草の専門でもなんでもないんですが、本草をやってる人は少ないので、結局、昭和時代の本草に関するディレッタントの生き残りの一人です。みなさんの中から専攻の方が出てくるんじゃないかと思うんですが、将来そういう方がお出になったら、お話にならないような、そういうふうな人間でございます。

まず、私ども、昭和の人間では、こないだ木村康一さんが八六歳で亡くなりましたが、これは生薬の先生ですが、本草が好きで、とうとう一生本草のことが好きでございました。八〇歳ごろから学問的活動はちょっと無理でございましたけども、それま

でたいへん熱心におやりになりました。それから上野さんがこの間亡くなりました。これは科学史の点から本草をおやりになりました。淡水産動物の分類や生態の研究者でございましたが、本草がお好きでございました。僕も動物と植物と違いますけども、同じ仲間で、先輩だと思っておったんですが、その人がこんなに本草の好きな人だとはびっくりしました。そんな次第でございまして、晩年には仲良くして頂きまして、たいへん幸せでございましたが、これもたいへんご高齢で、お亡くなりになりまして残念でございます。この方は、死ぬまでお元気で感心致しました。私も本年八三歳になりますが、どこまでいけるか、まだ三つばかり本を校正しておりまして、今も目を酷使しておるような次第でございまして、どこまでいけるか分からないんでございますけれども、まぁとにかく本日はそんなことで、お招きにあずかりまして下手な話をさして頂いて、楽しんで頂きたいと思いますので、どうぞ。それからだんだんと興奮して参りますとつい脱線いたしますので、その点どうぞお許しをお願い致します。思い上がったようなところがあれば、誠に恥ずかしいことでございますので、お許しをお願い致します。

私もでたらめの本草でございますけれども、私の方はどちらかと言えば、植物分類学を主体にしたものでございまして、それの発展でございますので、従いまして、中国のこの植物は日本のこの植物だというアイデンティフィケーション同定でございますですね、それに興味を持っておりまして、それが主体でございます。それをやってるのは現在日本にほとんどありませんので、私が昭和の生き残りぐらい。牧野さんもちょっとおやりになりましたけれど、老人になってからです。私も老人になってからですけども。牧野さんはあんまり成績が良くなかったです。松村任三さんの方が良かったのではないかと思います。それで、松村さんの前では、日本人としてはその当時としては、私の今言うている同定の方では小野蘭山がいちばん優れておりました。時代と共に日本でも中国でもいろいろな科学的な知識が発達しましたが、植物もよく調べられましたから、それに基づいて言うわけでありますから、世の中の進歩を背景にして先輩を批判するわけでございますが、これはもう後の人ほど勝手なことを言えるわけで、私共も後からまたボロクソに言われるだろうと（笑い）思うんですけど、それが当然でございまして、そういう立場から申し上げます。人間としての能力というふうなことから言って、やっぱり本草の同定は小野蘭山が日本人としてはいちばん優れていたと私は思っています。

貝原益軒が優れていると言う方もございます。貝原益軒は日本に初めて本草学を、日本のものを立てようとしたという、そういうふうな意味からは非常に優れた人だと思うんですけれども、実際の同定そのものは貝原益軒も間違いだらけであります。それでも貝原益軒の『大和本草』に従来の間違いをいくつか訂正しております。そうい

うことで今のところ、私の考えでは小野蘭山の方が優れた人であったと思います。どうして京都の公家の庶子にあんな優れた人が出たのか、それは不思議でございますけど、そんなことはどこにどんな方が生まれるか、これはもう全然わからんことでございます。あの、杉本さんも『本草綱目啓蒙』の文についてお書きになっておられまして、私もほんとに感心しております。ごく短い言葉で句読点も何もないのに良く分かる、あれは優れた言葉で、文としても誠に優れた本でございます。それから的確な形の表現、我々は言葉で表現するのに的確な言葉でピシッと表すことが同定する時に必要なんです。私は理科でございますけど、やはり事柄を、短い言葉ではっきり人に分からすというふうなことには感心もし、関心も持っておりまして、従いまして、そういう点から言うても、蘭山の本は面白いと思っております。

私は、本草の同定をやっておったんでございますけど、みなさんのお書きになったものなんか拝見さして頂きますと、たとえばこの間山田さんのご本頂きまして、別な点から本草学を取り上げると、非常に面白い、本草学者が考えもしなかった方面から本草学を取り上げると、新しい立場から別の価値も感じ、批判もされるんじゃないかと思って、「面白いなぁ」と、存じます。私もあっちこっち、好きなんですけども、やはり自分の関係したことだけしか、ご参考になるようなことは申し上げられません。私、本日は口はばったいですけども、昭和のボロボロの人間が、こんな新しいみなさん方にバトン・タッチをお話をして、出来たら、そういうことが出来たら私も非常な幸せだと思いまして、申し上げる次第でございます。

山田さんにお願いしてプリントを二つ作って頂きました。一つは「ジャパニーズ・スタディズ・オン・チャイニーズ・プランツ」というやつで、「中国植物に関する日本の研究」というのを昨年雲南のシンポジウムで講演しました。国際資源植物討論会というシンポジウムの名前でございまして、それは昆明でございました。十月四日にやったんでございます。もうちょっと日が過ぎました。雲南から帰りまして、軽い胃潰瘍をやりまして、消化しにくいものを食うたりできませんので、消化しやすいものを食っておるんです。あまり飲むのも慎んでおります。この時はそんなに気張っているつもりはなかったんですけれども、老人の植物分類学者として珍しがって頂いて、そこでちょっといい気になりまして、僕はじきにいい気になる方でございまして、誠に恥ずかしいことでございます。そういうことなんで、ちょっと食い過ぎたり（笑い）、またよく人と喋ったりしてですね、そんなことで疲れたんじゃないかと思いますが、一過性の胃潰瘍をやりまして、今朝も医者へ行ったんです。ほとんど治ってるんですが、まだ医者とつながっておるような次第でございまして、誠に不調法なことでございます。

これの小文の内容につきましては、その

目的が中国人に私どもの仕事を紹介するのでございますので、こんなもんをみなさんの前でお話しするのは、たいへん恥ずかしいこってございますけれども、ごく簡単に申し上げます。日本の植物の研究というのが、二つございまして、一つは中国のものを日本人が習うということと、それからもう一つは日本人が中国のものを研究しまして、それを中国の人が今日習っておるということでございます。西洋の植物分類学を取り入れるのは日本の方が五〇年ほど早うございましたんで、従って未だにその影響が残っています。私どもは学生時代に、今から六〇年ほど前でございますけれども、中国は土地が広いし植物がたくさんあるから、あんなところで新しい研究を各地でやられたら、我々はその成果を習うだけだと思っておりました。事実、一九一一年からだんだんといろいろな学者が出てきて、良い仕事も致しましたし、感心致しました。ところが今になって考えてみますとね、どうも余所のもんは立派に見えるようにも思うんです。あんまり感心しすぎたんじゃないかというふうにも思うんですね。日本のものを悪く思い、向こうのものを良く思う。これが世の常でしょうが、またこの逆の人もあります。最近中国では、中国の植物志が出ておりまして、それ見ると日本の学者の仕事が大きく影響しています。しかしあんまり、中国人対日本人、そんなこと思わないで、各人が自分の勝手なように、好きなようにお互いにやったらいいんじゃないかなと思います。学問に国境や人種の違いは全くありません。お隣のことから習うことは充分習って、こちらもやりたいことはどんどんやれば、中国のためにもなります。それでいいんじゃないかと思っております。

そんな関係ですが、まず日本が習った方から申しますと、中国のほうの古代の文化が非常に高いのは申すまでもないことで、中国民族に対して私ども、未だにやはり劣等感を持っております。「あの人たちは偉いんだ」というふうに、まだなかなかそれが抜けない。現実に中国の人と話した場合、そんなに特に偉いと思いません。確かに優れた方はおられます。そうかと思うと、そうでもない方もおられまして、結局日本人百人と中国人も百人並べたら、あまりちがいはない。中国人はゆったりし、日本人はすばやい。これは大陸と島との気候風土の影響かなどと思っております。

しかし歴史ということから考れば、とても中国の方は文化が優れていた。奈良時代に、中国の『神農本草経』が入ってきまして、それを典薬寮の教科書にして、いろいろ日本人も習いました。それから留学生たちがいろいろな薬を持って帰ったでしょうし、いろいろ見聞きしたものを直接日本人に伝えたわけでございますが、それでやっぱりその間、間違いもたくさんあったと思います。たとえば、アオイという京都の葵祭のアオイのあの字でございますね。葵はカモアオイ、実際この辺に野生してるものに当てました。これは京都では加茂の祭りのシンボルでございますが、あの葵の字でございますが、中国では、あれは食べ物の

フユアオイのことでございまして、中国にはカモアオイはございません。その昔、おそらく、加茂アオイは葉がフユアオイに似ておりますからフユアオイに当てたんじゃないかと思います。また、桂にしても、中国の桂というのはニッケイとかモクセイのこと、香りのよいものでございます。それをこの辺に野生しておるカツラの木にあてました。そんなふうに、昔から加茂の祭りのシンボルであるカツラとカモアオイとに間違いの字を使うております。今更直すわけに行きませんし、そのまま我々も楽しく使わしてもらってます。奈良時代には『神農本草経』が教科書でございまして、全然中国のものを習っておったわけでございます。それから平安時代になりますと、唐の時代の『新修本草』が新しい本ができたとして、『神農本草』に代わって教科書になりました。それで薬を習っておりまして、平安時代には無論『新修本草』の薬を使ったわけでございます。その間いろいろなものが朝鮮を通じて、または直接に日本にどんどん入って来たと思います。延喜式の巻三十七の典薬寮にはたくさんの薬物が日本の各地から産することになっております。初め私どもも「こんなん多くはでたらめや」と思っておりましたけども、どうもその中には、今は無くても昔は入っておったんじゃないか、再検討しなければならないものもございます。昔の朝鮮や中国からの移民の人がいろいろな薬や生物を持って来て、栽培もしたのではないかと思われます。『延喜式』を見ますと近江にかなり、たくさん薬草を栽培しておったというような、記録になると思われますが、ああいうのを見てみますと、近江へかなりな生の植物を入れて栽培しておったが、それがだんだん歳を経て失ってしまった、また入れてまた失う、それを繰り返して現代に到ってるんでないかとも思います。私どもは、室町時代にもやはりいろいろ中国からのものが入ったと思いますが、それもはっきりした記録がありません。これからだんだん出てきて、後ほどよく分かってくるとも思います。

江戸時代のものはかなりよく分かっておりまして『本草綱目啓蒙』にも書いておりますし、『本草綱目啓蒙』や、『本草綱目』の図譜として岩崎灌園が『本草図譜』を出しておりますし、これらで証拠が残っておりますが。江戸時代にはたくさん入った。殊に八代将軍吉宗が馬なんかもヨーロッパから入れたが、中国の薬草もたくさん入れて栽培させ、それが残っておりました。我々は江戸文化の残りを昭和の初めまで小石川植物園にいろいろな種類が残っておりまして、それを見ることができました。

そういうように専ら中国から入ったものを研究しておった次第です。向こうの方の人が先生でございまして、こちらはその研究に合わすように努力するのでございました。ところで日本の文化がだんだん高くなって参りまして人口が増えますと薬がたくさん要るようになりました。文化が高くなると医者がたくさん要ります。中国から薬を輸入するのがたいへんですので、日本にある野生のものを使うことをお医者さんが

やり始めました。日本に野生のものを薬用にすると、これはもう全然中国のものに当てておるわけですから、もし当たっていなければ、間違いの薬を飲まされたことになりますし、時によっては毒にもなるわけです。随分日本人は、我々の祖先は毒を飲まされたかも知れない（笑い）。あるいは効かない薬をありがたく飲まして頂いた。それで、「これではどもならん」と言うので、有志の反発で江戸時代に研究して、本草学が発達するわけです。間違った薬を飲まされたお陰で日本人は勉強するようになった。それがやはり学問の発達に、刺激になったと私は思っております。そんなことで小野蘭山のような人が結局出てきたと思います。このあとでいくつか、江戸時代の人たちがどうしても分からなかったこと、今の植物学から言えば実に何でもないことをお話し申します。

日本に野生する植物は中国東部の植物の一部ですから、中国の西の方の植物なんかはとても分からない。それで分からないと正直にいうほど偉くない人はですね、偉い人は「分からん」といってそれでいいわけです。ところが普通の人はですね、なんとか中国の薬にひっ付けたいと努力しました。それでまぁしくじるわけです。そんなことで、そういう苦労のいくつかを後でお話ししたいと思います。

ここまでのところは中国人にとっては、「そりゃお前とこの勝手な仕事や」「わしとこは教えてやっただけだ」「お前とこは自分で間違うて、お前とこで苦労してるのだから、そりゃお前とこで直したらいいじゃないか。そんなことわしらはちょっとも面白うない」でありましょう。実はしかし、日本の本草学は中国にとって無意味ではないのです。やはり現在中国でもですね、古代の植物を間違うて使うていることがありますが、それが分からない。日本では古代に教えてもらったものが残っておりますから、または、勉強して古代のがそのまんま伝わっております。『神農本草経』の柚（ゆう）は日本では正しくユウで伝わっていますけども、中国では現在のユウという字はザボンのこと。こんな大きな果実。これは中国の間違いなんですね。それから『新修本草』にあります、ウコンとキョウオウとは、日本では正しく『新修本草』の通りをきちんと伝えておりますけども、現在の中国の人はさかさまにしておるんですね。それで私参りまして、「中国では今はさかさまとなっている」と言ったら、『新修本草』を読んでですね、「なるほど、そうだ」と納得しました。中国の生薬の方々はあまりそういうことには無関心。現在のことはよく知っておるけれども過去のことには無関心。無関心であってはならないのですけれども、そういう点では日本の本草学がやはり参考になるのではないかと思われます。

中国の蛔蕎（ヒ）の話、ソ連にセメンシナというサントニンをふくむ回虫の薬があります。あれは戦前に日本に入らなくて非常に苦労したのですが、京都の日本新薬で、ヨーロッパのスカンジナビアの海岸に生えていた植物をだんだん改良して壬生（ミブ）ヨモギという

のにして、そこからサントニンを抽出しました。これを日本のすべての小学校に配りました。これは京都大学の総長であった服部さんが、回虫をなくそうと思ったら、すべての小学校へ配ったら無くなるであろうというので、すべての小学校へ配ったわけです。そうしましたらサントニンはよく効きまして日本から回虫は無くなりました。従って日本新薬は効きすぎたお陰で、せっかく開発した薬が売れんようになりました(笑い)。たいへんきれいな話なんですが、そんなふうに戦前はソ連のセメンシナはたいへんな、重要な植物でした。それがソ連から中国へ、そのセメンシナをやりまして、中国では今、セメンシナを栽培しております。それを蛔蒿、回虫の蛔と蒿はヨモギです。蛔蒿という名前で新しい生薬として、使っておるんです。ところが『新修本草』を見ますと、鶴虱というのがありまして、そのカクシツはまさにセメンシナでございまして、西戎から入るもので、それはヨモギに似て、蟯虫によく効くと書いてあるんです。それでソ連が開発したものではなしに、非常に古い時代から中央アジアにある鶴虱という植物を、駆虫剤に利用していました。西洋医学としても利用していまして、日本は西洋医学としてそれを習いました。「カクシツというのはセメンシナだ」と西洋医学をやりました日本人の森立之が書いています。従って私は中国の生薬学者に「お前たちは、カイコウと書いているけれどもあれは『新修本草』にあるカクシツだ」というふうに言ったんです。「なるほどそうだ」って言うんですよ。

そんなことでございまして、やはり、日本のそんな本草の研究も、中国人はやはり知る方がいいんじゃないかと思うんです。日本人はそういう点でいちばん最初に出た言葉、それはよく分からないんですけども、いちばん最初に出た文献にあたり、名前をアイデンティファイする。薬は言葉になる前から利用されているわけですが、言葉にならなければ我々には分かりません。その薬の産地がはっきりしておりますと、案外パッとこう、当たるわけです。これは分布的な立場から同定ができる場合です。それから薬には効用がありますので、何々に効く、「回虫に効くと言うならこれだろう」というようなことで、案外そういうことからごく普通のものは分かることもあります。そういうようなことからいちばん最初の古典、古典はいろいろありますからその本によってみな違うわけですけれども、それぞれの本のその言葉はこの植物だというのを同定することができます。それは大抵の場合産地が挙げてございますから、産地である程度正確に同定できます。その名の最初の産地を、タイプロカリティと言うんですが、それで同定しております。

日本の本草学者はずっと平安時代から江戸時代まで日本の植物と中国の植物との同定をやっていったわけですが、植物分類学をやるようになりましてから、それを取り入れて、タイプロカリティによってそれぞれの本のそれぞれの植物を同定するということをやったのは、牧野さんが初めてであ

りました。その当時、牧野さんでなくても誰でもそう考えるのは当たり前でありまして、従って時代の風潮としまして、我々もそれをやっておるわけであります。それまでは漠然と、各本を総合して、抽象的に当てておりましてから、なかなか中国は幅が広いですから、あちこちの産地のものも違ますし、従って難しかったんですし、それで間違いもたくさんありましたが、そういうふうに各本とその各種の産地とをはっきりとさして同定してくると割合に当たってくるように思います。

江戸時代では漠然と当てておったんですけども、小野蘭山は中国から入ってくる生薬と日本の野生のものと比べまして、その当時としては中国の生薬の正確な知識を持っておりました。『本草綱目啓蒙』は、今読んでも、なかなか優れた本だと存じます。

今まで申し上げたことは中国の方が全然お師匠さんで、私どもはこれを習って、それをやってる間に日本にも研究の実力がついてきまして、で、小野蘭山のような方が出て、その当時、そのほかに、平賀源内という方がいました。この人は非常に優れた人でいろんなことやりましたんで、従って精力が分散されておりますから、本草だけをやればもっと優れたかも知れませんけども、仕事としてはごく少数しか平賀源内のは残っていないわけです。ところが小野蘭山は一生そればっかりやっとったんで、それで残っておるわけでございます。先程申しました松村さんはですね、茨城県の松岡藩の家老の息子で、そんなに自分が偉いというのを人に宣伝する必要はなかったんですね。それでなかなか確実にやっておられますけども、あまり人に分かりやすくものを書くということをしていらっしゃらない。しかしかなり興味を持って『植物名彙前編』という本を著作し一九一四年に出版されました。内容は、中国の漢名と日本名との同定でございます。そういうものを丁寧にやられました。この本もとっても分かりにくい本で、索引も具合が悪いし、それから本も非常に読みにくいが、ところが読んでみると、非常によく勉強しておやりになったと思います。しかし松村さんの時代はまだ、各図書のタイプロカリティによってきっちり決めるということはやっていらっしゃいません。だからものによって産地の少ないもの、特産のものは非常に正確にやっておられる場合もありますし、そうでない場合もあります。それから植物名彙に出ている漢名の同定はこれまでの小野蘭山なんかの考えをそのまま移してるものもあります。玉石混淆でございまして、中にはよいのもありますし、間違ったのもあります。牧野さんの場合はほとんど松村さんの植物名彙を利用して、それを基礎としてやっていらっしゃるわけでございますけども、各本の各種のタイプロカリティからやっておられます。そういう点では優れております。牧野さんは不遇でございましたんで、なかなか自己宣伝をよくやって、私は若い時は感心しましたけれど、なるほど優れた方には違いございませんし、今でも感心しておりますけども、やはり本の書き方がそうい

うふうな書き方でございました。漢名の同定なんかは後にも申しますけども、今から思えば間違いもたくさんございます。

現在の同定でございますけども、現在は中国では非常に良い本がたくさん出ておりまして、中国植物志というのが大体三分の一ほど出ております。これが全部出れば非常に便利だと存じます。それから『中薬大辞典』という非常に便利な本も出ております。これらは中国の現在の知識を集めて、それぞれを分かりやすく書いてございます。それから『中国高等植物図鑑』というのも出ております。従って、我々が今中国の本草の知識、生薬の知識を得るのは非常に楽でございまして、そんなもんなんでもないことでございます。その知識からいろいろなことを判断すると、分かるのでございます。

ところが日本では西洋医学が入りまして、大きく発展しました。従って江戸時代の、そういうような間違いのことなんかは、「ばかばかしくてそんなもの誰も相手にせん」と、いうふうなことでございまして、間違いがそのままになっております。それで私は、民族植物学的な立場から現在の中国の本の知識を取り入れて、一九八五年に『本草の植物』というのを保育社から出しました。この本であります。それから一九八七年に『植物文化史』というのを出しました。恐縮でございますけれどもお回し下さい。現在の中国ではこの名をどういう植物に当てておるかということを知りまして、これまでの名前であて間違っていると思ったのは、こういうふうにしたらどうでしょうかというつもりでございます。しかし無論私の同定にもたくさん間違いもございましょう、直さねばならないこともたくさん落ちていることでございますし、分からんとこもたくさんございます。現在の植物分類学の知識、分類地理学の知識で、これまでの分からなかったところを、とにかくやってみたというような次第でございます。

以上は日本が、中国から習った話ですが、以下は中国の植物を日本の科学者が研究した方でございます。日本の方は江戸末期に植物分類学をやるようになりましたが、既に江戸時代に非常に優れた博物学が発達しまして、それのベースに乗って西洋の植物学を取り入れましたので、非常に早く取り入れることが出来た。植物は本草の方から、かなりよく調べられており、岩崎灌園の『本草図譜』で見られますように、普通にあるもんはよく分かって、図示されており、みなさんが関心をもっていらっしゃったので西洋の植物学がスッと入りました。いちばん最初は伊藤圭介がチュンベリーの『フローラ・ヤポニカ』を翻訳した、『泰西本草名疏』でございます。あれが非常に優れた本であります。リンネの二十四綱法を訳したもので、『フローラ・ヤポニカ』の植物を配列したものです。これは圭介の非常に若い時の著作でございますけれども非常に優れた本です。ところがあんな若い時に優れたことをやりながら、後があまり優れた仕事をしていない、それよりも圭介のその本を利用した飯沼慾斎が本当に現物につ

きまして、日本の植物とヨーロッパの植物やアメリカの植物とを対比しました。理論的に言えば、伊藤圭介がいちばん最初で、その次に飯沼慾斎が本当の仕事をした。

しかし、飯沼慾斎の『草木図説』（一八五六―一八六二）にもたくさん間違いがございます。また学名を同定していないのも多くあります。間もなく明治になりまして、東京大学の方々がヨーロッパへ留学されて帰ってこられました。留学して植物学を勉強するとなるともう、アップ・トウ・デイトにすぐなります。国際命名規則による植物学名の発表は、日本人でいちばん早くやったのは、一八八八年に伊藤篤太郎さんという人が二三歳で、ランザニア・ヤポニカ Ranzania japonica を発表しています。蘭山の名前がついているんです。その次が牧野さんと大久保さんがテリゴヌム・ヤポニクム Theligonum japonicum 一八八九年。その次が矢田部さんでキレンゲショウマ・パルマータ Kirengeshoma palmata を発表しておられます。こんなように優れた日本の植物分類学者が出まして、このあたりからずっと日本では植物分類学をやるようになりました。たまたま明治の拡張時代でございまして、台湾や樺太や朝鮮が日本に入りますと、そこへ植物学者を送りまして、国のお金で研究させたものです。いずれも東京大学出身の学者でございます。

日本の国の方針も優れておったわけでございます。それで早田文蔵だとか中井猛之進とか宮部金吾、小泉源一、工藤祐舜などの方々が、どんどんと研究を進めて新種を書きました。それから満州国ができますと、北川政夫さんが行かれて研究されました。私どもも台湾や朝鮮、樺太、千島、満州などに行きまして、植物採集をやりました。先程申しましたように、その頃は中国の学者が研究したら、とても向こうの方はたくさん植物もあるし、地域も広いし「とてもかなわん」と思うておったのですが、ただ「行けるところだけ行け」と言うような次第でございました。その後中国と日本と仲が悪くなって、非常に不幸な戦争、中国に非常に迷惑をかけたのでございます。戦争が済んでから一九五五年に私もアフガニスタンへ行ったのですが、それは木原均先生が小麦の起源について、パン小麦の起源について関心持たれまして、それからヒンズークシへ採集に行くんだということでお供した次第です。

その前に日本の山岳連盟でマナスルへ登山がありまして、その時に中尾佐助さんがネパールの植物を持って帰られまして、私のところへ持って来られたのですけれども、なかなかおいそれとは分かりません。比較する標本もございませんし、仕方がなかったんですが、ふっと、河口慧海さんという方がチベットへ入られて植物を持って帰って来たという記事を読んだことを思い出しました。それで植物学雑誌を調べましたところ、一九一四年に河口慧海さんがおよそ千ほどの植物標本を取りまして、持って帰って先程申しました、伊藤篤太郎さんのところへ持って行った記事がありました。何故そんなことをしたかと言うと、河口慧海

さんはチベットへ入られましたけども、日本へ帰ってチベットや、お経の話をすると「あれは嘘やで」と信用されない、いまいましいことだというような話をされた。伊藤さんはそんなことならチベットに生えている植物を持って帰ってきたら、証拠になると言われた。それで植物採集をされたというわけです。非常に優れたお方ですから、やりかけると徹底しておやりになって、千枚も非常に優れた標本を採って来られて、おまけにチベットの土名までも書いておられました。伊藤篤太郎さんの標本は没後科学博物館に入っておりますので、科学博物館に聞きましたところ「ある」っていうんです。「誰も調べないで放っとる」と、「それなら貸してくれ」と申し出ました。借り出しまして研究したところがキク科で十二ほど新種がございまして、びっくりしました。チベットの植物はあまりやってないんですね。それでそれを一九五三年に書いたのですが、この三年ほど前に、それから三五年ほどしてから、中国からチベットの現在植物志が出て、それには私の書いた新種を再確認して下さったわけです。現在、中国では多くの人が非常にたくさん優れた仕事をしてるみたいですけれども、やはり場所が広いですから、各地域になるとやっぱりゆっくりしてるんです。日本はそういう点で早いです。

私はこのチベットの標本を同定して、それからヒマラヤのを研究したのでございます。中尾さんが採って来た標本を同定しましたが、中尾さんは、同じものをたくさん採って来られましたんで、京都大学にワン・セット、科学博物館にワン・セットというふうに配られました。木原先生は、丁度そのマナスル研究の長をしておられましたので、木原先生に頼んで持って行ってもらったんです。そんなことから木原先生から一九五五年にカラコルムへ行くので、お前も来てくれないかといわれました。私は実は体も弱かったし、命が怖かったのです。木原先生は、北大の出身ですが最初に京大理学部植物教室の助手をしていらっしゃいまして、我々の方じゃ大先輩でございまして、私も農学部教授の先生に習いました。「お前も来い」と言われて、「ほい」と行く気になりました。それでアフガニスタンの方へ参りました。また、参りましたのは中国へどうしても行けないから中国の西の方、あるいは南の方を研究しよう、やれば、我々は中国の東の方と北を研究しとりますから、「勉強になるだろう」ということで参加したのでもあります。その後、日本がだんだん経済発展致しまして、探検隊が出られるようになりまして、ヒマラヤ・ヒンズークシの方も度々行かれるようになりました。それから私の友達の原寛さんにヒマラヤ東部の方をおやり頂くようすすめました。私は西の方をやりますから、お互いに協力しましょうということでやったんです。原さんは一九六〇、六五、六七、六九、七二年と度々植物探検隊を出されまして、膨大な標本を持ち帰られました。私はその中のキク科を担当して研究しました。そんなことで日本の戦後の分類の研究は、と申し

ましても中国に比べたら一握りの人間しかいないんで大したことはありませんが専ら中国の西と東の方を研究しておりました。その後京都大学に東南アジア研究所ができました。東南アジアの方は分類の助教授の田川さんと若い方々に、タイランドを研究して頂いたり、それから岩槻邦男さんが南の方のボルネオに行かれました。サラワクとブルネイです。堀田満さんは度々スマトラへ行かれました。ところが肝心の中国はなかなか行けなかったんですが、やっと一〇年ほど前から日中の友好が田中さんのお陰でできて行けるようになりました。従いまして日中共同採集をやっております。

現在私は中国の雲南省、最も植物の種類の多いところ、世界でいちばん植物の多いのが雲南省でございますが、そこで中国の昆明植物研究所と日本の京大や東大の方が共同で採られたキク科植物を楽しんで勉強させてもらっております。やっと八三になりまして念願の雲南のキク科植物を勉強することができて、非常にありがたい、一日でも多く研究したいと思うています。こんな老人がそんなことをやったら不注意な間違いだらけでしょう。そうかも知れませんが、知っているけれど止められないというところです（笑い）。以上が現状でございます。我々としては中国は最も植物の分布上肝心なところを占めているし、我々はとてもかなわないと思ってましたが、周囲が日本で研究されていますから中国植物志の文献を見てみると日本人の文献が可成り多いんです。びっくりしました。「これは中国人が不勉強な論文を書いたら嫌がるのは当たり前やなぁ」と思っています。これまであまり気がつきませんでしたが、これからは気をつけないかんなぁ、もっと注意せないかんなぁと、思っています。「大谷探検隊採集新疆省天山植物」というのは、二〇枚ほどの標本でございまして、少ないものでございますけども、これは先程申しました、河口慧海は一九一四年ですが、河口慧海よりも先に、大谷探検隊の吉川さんが採って来られました。これのカラー写真は二倍の大きさにしたものでございます。標本台紙は長さ二〇センチ、幅一四・二センチの大きさの野冊でミニアチュアの野冊にはさんであります。一つの台紙に五―六個の小さい腊葉が張りつけてあります。種はいくつか重複していますので、それの同定をやりました。ところがです、天山北路の植物は、日本にほとんど植物の標本は入ってないんです。私は比較する標本なしに全然、文献によってやったものでございます。しかしその中で、三つほど日本と同じものもございますし、それから日本にはないけれども北半球には広くあるものも三つほどありました。天山山脈の特産植物がありました。

昭和十八年に日本の山西学術調査団が採集した植物標本があります。それは土岐章さんという方が隊長で舘脇採さんが植物班長として行かれまして、山西の植物を採集して持って帰ったんです。私はそれのキク科植物を同定致しました。その後日本が戦争に負けまして、学術調査団というのが解

体いたしました。……それでこの同定は出版することはできないと、すっかり諦めておりました。その中にタンポポの新種や、いくらか新しい見解もありました。今度、新疆省の植物を研究しましたので、古い論文を引っ張り出して、調べましたところ、山西省の五台山のタンポポ、小さいこんなものですが、中国でまだ書いてないんです。三〇年も放ったらかしでしたがまだ書いてないようなんです。従いまして、それを今度出版しました。こういうふうに中国の植物は、私以外の日本の方もどんどん研究していますし、中国の方では研究者も日本よりずっと多くどんどんと研究している次第です。日中協力して大いに研究すればいいわけです。中国の今の植物志ですが、今までに全体の三分の一が出版されています。全部出ればたいへん結構なものでございます。多くの研究者が著作しているので、あるところはよくできておりますし、あるところはそうでもないのがあります。私、それ言おうかなと思うこともありますが、しかし気を悪うさして協力にさしつかえてはと思うて（笑い）控えていますが、学問のためにははっきりと言った方がいいわけです。ウー・チョン・イ呉征鎰という元雲南省の昆明研究所の所長で、七六歳ぐらいですが、土曜日に会うことになっております。ウー・チョン・イさんは、この人は非常に優れた立派な方で、たいへんな優れた学者です。それにそっと聞いてね、「あれはあまりよくないと思う」と言ってみようと思っています。

最後にオソマツですが、本日のお笑い草にこれをお配りします。これ一枚ずつ。これは今朝作ったのです。私は言葉が下手で、アクセントも悪いので聞き苦しいと思いますが、勘弁して下さい。字で書けばわかると思い、字で書いた次第です。

日本語が付いてあります。胡楊（コヨウ）という植物。これはヤナギ科です。図①挿入これがコヨウの絵です。ポプルス・ユーフラティーカ（Populus euphratica OLIV.）、です。これは内蒙古の西から甘粛・青海・新疆・外蒙古・ソ連の中央アジア・コーカシア・エジプト・シリア・インド・イラン・アフガニスタン・パキスタンに分布しています。聖書の中でユーフラティス地方に出る楊柳で、この木に竪琴をかけてシモンを思い出して泣いた囚われ人の話にもとづきコトカケヤナギの和名がつくられた。日本ではコトカケヤナギがコヨウであるということは同定を誰もしてなかったんです。コトカケヤナギはもっと西の方の話でした。ところが実はそれが広く中央アジアに分布しておりまして、コヨウと言って楼蘭の遺跡なんかに出てくる建築材や燃料はみなコトカケヤナギであります。コトカケヤナギというおかしな名前よりもコヨウの方が短くてい

①コヨウ Populus euphratica OLIV.
(Gartenflora VII t. 228 より)

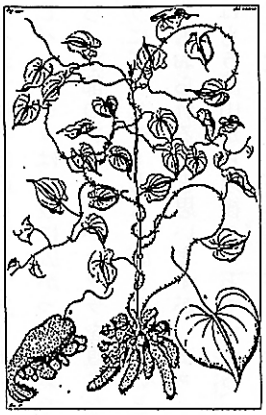
いと思います。コトカケヤナギは木村有香さんが戦前にポプルス・ユーフラティーカにちょっと面白がってつけた名前です。あまり知られておりませんけれど、コヨウというのは西の方のポプラの意です。楊柳の楊というのは枝の立つ方で、コヨウの楊です。柳は枝のたれる方でシダレヤナギのことです。中国の人には胡楊は珍しくないんですが、日本人にはこのコヨウという名はあまり知られていませんでした。学名のユーフラティーカはユーフラテスのところにあるポプラ。西の方ではポプラがたくさん植えてありまして、現在日本によく植えてあるポプラ、イタリアン・ポプラと言うんですが、学名はポプルス・ニグラであります。日本に野生のポプルスもありまして、ヤマナラシとかドロノキであります。

その次には刺密のお話を致したいと思います。シミツというのは、アルファーギ、プソイド・アルファーギ・デボー Alphagi Pseudalphagi DESBAUX なんです。マメ科の植物で、分布は甘粛・内蒙古・新疆・中央アジア・西アジア・東ヨーロッパ。夏に採集して、布を地に引き、これに枝葉を入れて叩けば糖粒が落ちる。それから枝や雑物を取り除く。糖粒は円形の小粒で黄白色。粘質があり、甘い。『隋書』の「高昌」に「羊刺」と名付ける草があるというのが本種であります。『本草綱目』の果部の三三巻のシミツというのは、『新註校訂国訳本草綱目』第九冊、三九頁では和名・学名・科名が分からなかったのですが、大辞典を見ましたらはっきり分かりました。ここに図②をお目にかけます。この話は、この間龍谷大学へ参りましたら、『隋書』の「高昌」のところで羊刺というのがあるが、あなた知ってるかと問われました。わたしも試験されたわけでございます（笑い）。たまたま知っていたんで「それは知ってる」と答えました（笑い）。ところが老人の悲しさで、学名はどうもマメ科でアルファーギだと思ったのですけれども、「間違えたら悪いな」と思って家へ帰ってから調べてお返事申しました。お返事申しましたら喜んで頂きました。小田義久さんという方です。私信を紹介して恐縮でございますが、「「高昌」の羊刺は私には、長年不明であったことが氷解いたしまして、喜んでおります。」と、御返事を頂きました。この羊刺、刺密はまた駱駝刺とも言います。羊も食うんですが、ラクダが食うんです。甘いですからね。今ラクダシという名前で、『中国高等植物図鑑』に出ています。中国では、何でもないことですが、日本ではよくわかっていませんでした。

②シミツ Alhagi Pseudalhagi DESB.（『中国高等植物図鑑』2611図より）

最後はカンショの話をいたします。日本で甘藷という字はサツマイモに使っておる言葉でございますけども、それは誤り。牧野さんもカンショをサツマイモにしておら

れました。甘藷は『南方草木状』に出ています。この『南方草木状』は、四世紀に書かれたと言われておりますけども、中の記事を読んでみますと非常に詳しく書いて、とても四世紀とは思われないんです。従って中国では現在は十一世紀に書かれた贋物だという説があります。私はそれが正しいと思っております。それにしましても、サツマイモはコロンブスのアメリカ発見以後、旧大陸に入ったものでございますから、十一世紀にそんなものが中国にあるわけがございません。それは何だろうと言うと、結局カンショは、ディオスコレア・エスクレンタ・バーキール Dioscorea esculenta BURKILL であります。これはヤマノイモ科で古代から熱帯アジアに広く栽培されております。日本ではあまりありませんので、御存知ありません。この図③がディオスコレア・エスクレンタです。それで現在の中国ではカンショはディオスコレア・エスクレンタにして、問題なしということになっています。



③カンショ Dioscorea esculenta (LOUR.) BURKILL (RUMPHIUS, Herb. Amboin. より)

もう一つ馬鈴薯というのがあります。これは日本でジャガイモとも言います。ジャガイモは、学名ソラヌム・チュベロースム・リンネウス Solanum tuberosum L. でございましてナス科でございます。小野蘭山が、ジャガイモを中国の福建省の『松溪懸志』に出ている馬鈴薯に同定しました。それは『薯筌小牘』という一八〇八年に八〇歳の記念を喜んでお弟子さんたちに配った本に書きました。それ以後、日本では小野蘭山と言えばなかなか信用されたものですから、バレイショの言葉が非常に広がりました。日本だけでなく中国でも広くジャガイモにバレイショの字を使っております。ところが『松溪懸志』によりますと馬鈴薯は「葉は樹によって生ず」とあり、つまり葉は木によっておる、纏い付いておるとあります。また、「これを掘り採れば形に小大ありて、ほぼ鈴子の如し」と、掘り採れば「色黒くして、円く、味は少し苦いが甘い」と書いてあります。これはジャガイモに合いません。ジャガイモも南米のものでございまして、そんなに早くから入っていませんし、広がっていません。それでジャガイモの中国名は牧野さんが取り上げられたように、一八四八年の『植物名実図考』に書いてある陽芋がよいと思います。この本で著者は絵も書いていますし、貴州と雲南と山西とで見ております。これは私のスペキュレーションでございますが、ちょっと図③を見ると、バレイショにあててはいかがと思います。葉はつるについているし、いもの集まりは馬の鈴に似ておるし、食べられるし、ひょっとしたらこれかも知れないと思います。バレイショという言葉はとにかく具合が悪いので、日本では南の方から入ったものですから、ジャガイモとすれ

ばそれで和名は正しいのであります。しかしバレイショは一般に広がった言葉ですから、京都のアオイとかカツラを直さないようにバレイショももう直したくないという方もおられるかと思いますが、まぁ、これはもう蘭山から以後のことですから、直しても大したことない（笑い）と思います。こんなことを言うていたらキリがございませんので、この辺で切り上げます。どうも失礼致しました。